

エリザベス・ピーボディの出版界への進出

ーホーソンの初期作品の出版を中心にー

Elizabeth Peabody's Advancement into the Publishing World:
The Publication of Hawthorne's Early Works

倉橋 洋子*

Yoko KURAHASHI

キーワード：出版社、アメリカ文学、超絶主義、ナサニエル・ホーソン

Keyword: publisher, American literature, transcendentalism, Nathaniel Hawthorne

要約

19世紀初頭のアメリカでは、作家、出版社、読者の大半がヨーロッパを志向していた。しかし、超絶主義者のエマソンによる1837年の「アメリカの学者」における知的独立宣言に鼓舞され、ヨーロッパの文学・芸術・思想からの知的独立をめざした動きが始まった。また、アメリカらしい文学をめざしたアメリカ人作家やそれを支えた出版社もいた。

本稿では、アメリカで初の幼稚園を1860年に開園した教育者として著名なエリザベス・ピーボディが1840年にヨーロッパからの輸入本や雑誌を専門とする貸出図書館兼書店をボストンに開店するに至った経緯や、従来明らかにされてこなかった彼女の書店開店の動機を考察した。ピーボディの書店では、フラーによる女性の教育ための「談話会」を開催し、超絶主義の雑誌『ダイアル』や書物の出版に携わり、またホーソンの初期作品を世に出した。ピーボディは教育者として人々に学ぶ機会を提供することを望んだのは確かである。彼女の書店開店の動機は、知のコミュニティを形成することであり、それによりアメリカのヨーロッパからの知的独立に貢献した。

Abstract

At the beginning of the 19th century America, most writers, publishers and readers still headed for Europe. However, being encouraged by Emerson's declaration of intellectual independence in "The American Scholar" in 1837, the movement of intellectual independence from European literature, arts and thoughts began. Moreover, there were American writers who aimed for American literature that did not imitate European literature and publishers

* 東海学園大学経営学部経営学科

who supported them.

This paper analyses the process and unknown motivation as to why Elizabeth Peabody, known as the educator who opened the first kindergarten in the United States in 1860, started her bookstore and circulating library selling and lending imported books and magazines from Europe in 1840. At her bookstore, Peabody held “Conversation” by Fuller, and published the Transcendentalist journal, *Dial* and other books, including Hawthorne's early works. As an educator, Peabody wanted to offer people a chance to study. Her motivation to open Peabody's bookstore was to construct an intellectual community, and that contributed to American intellectual independence from Europe.

はじめに

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の義姉、エリザベス・ピーボディ (Elizabeth Peabody) は、アメリカ初の幼稚園を 1860 年に開園した教育者であるが、1840 年にヨーロッパからの輸入本や雑誌を専門とした貸出図書館兼書店を開店したことも知られている。ピーボディはその書店にて、本の販売のみならず、マーガレット・フラー (Margaret Fuller) による女性達のための「談話会」(“Conversations”) を開催し、超絶主義関連の書物やホーソーンの初期の作品を出版した。女性がビジネス界に進出することはおそらく初めてであった時期に、ピーボディは出版界に進出した。

ピーボディの書店開店、出版界への進出は、従来ピーボディの伝記の中の一つの行動として扱われてきた。ルイズ・ホール・サープ (Louise Hall Tharp) は、ピーボディの書店に出入りする知識人を中心に扱っている。ブルース・A・ロンダ (Bruth A. Ronda) は、初の本格的な伝記である『エリザベス・パーマー・ピーボディー』(*Elizabeth Palmer Peabody: A Reformer of Her Own Terms*, 1999) において、改革者としてのピーボディを描いてはいるものの、フラーの「談話会」にページを割いている。また、メーガン・マーシャル (Megan Marshall) は、『ピーボディ姉妹』(*The Peabody Sisters: Three Women Who Ignited American Romanticism*, 2005) において、ピーボディの書店開店の事情やそこに集った超絶主義者に焦点を当てている。しかし、ピーボディの書店開店の動機はこれらの先行研究では明白にされていない。

本稿では、先行研究を参考にしつつ、アメリカの出版業界初期において、ピーボディが書店をボストンに開店するまでに至った経緯や、従来明らかにされてこなかったピーボディの書店開店の動機、およびホーソーンの初期の作品 (*Grandfather's Chair*, *The Liberty Tree*, *Famous Old People*) をピーボディが出版した意義を考察する。考察に当たり、当時の出版界の状況等を明らかにした上で、ピーボディの手紙や著作物、ラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson) やウィリアム・エラリー・チャニング (William Ellery Channing) の手紙等を解読する。

第一章 19世紀初頭のアメリカ文学と出版界

ピーボディの書店開店に至るまでのアメリカ文学と出版界の関係や状況を見る。19世紀初頭のアメリカでは、1836年にエマソンやジョージ・リプリー (George Ripley) 等が超絶主義クラブを設立し、1837年には「アメリカの学者」(“American Scholar”)に代表されるヨーロッパの学問・文学・芸術・思想からの知的独立をめざした動きが始まった。その背景には、アメリカでは19世紀半ばのアメリカンルネサンス期に至るまで、イギリス文学を文学作品の模範としていたという事実があった。例えば、アメリカの最初の職業作家と言われる18世紀のチャールズ・ブロックデン・ブラウン (Charles Brockden Brown) の『ウィーランド』(*Wieland; or, the Transformation*, 1798) は、イギリスのゴシック・ロマンスの影響を受けていると指摘されてきた。また、アメリカ人読者には、アメリカ人作家よりもイギリス人作家の方が知られており、文学作品の大半はイギリス人の書いたものの輸入本であった。作家も読者もイギリスを向いていたのである。ホーソーンの初期の作品、『ファンショー』(*Fanshawe*, 1828) にもその傾向がみられ、ホーソーンが愛読したウォルター・スコット (Walter Scott) の作風に類似している、あるいはチャールズ・ロバート・マチューリン (Charles Robert Maturin) のゴシック・ロマンスを採用している等と指摘されている (Gale 161)。¹

出版界においても、18世紀には製本のための必需品、用紙、インク、印刷機等の製作には熟練を要したので、輸入品に頼っていた。また、アメリカ人作家の作品、とくに長いものは出版のためにロンドンへ送られ、新聞や説教集等の類がアメリカで印刷されていた (Winship 11)。19世紀初頭でもアメリカの出版社による出版物の著者は、2対1の割合でイギリス人の方がアメリカ人より多かった (Fink 149)。その理由の一つに、国際的な著作権が1892年まで存在しなかったために、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) のようなヨーロッパの作家による作品の海賊版が横行していたことがある。アメリカ人作家は作品に対する芸術的保護も販売からの経済的保障もなく、逆にヨーロッパの作品の海賊版との競争を強いられていた (Rose 93)。そのような状況下では職業作家として生計を立てることは容易ではなかった。

しかし、それにもかかわらず19世紀初頭にはアメリカ固有のテーマを扱い、初期アメリカ文学に貢献した作家もいた。ワシントン・アーヴィング (Washington Irving) は、アメリカを舞台にした短編集『スケッチ・ブック』(*The Sketch Book*) を1819年にアメリカで、1820年にイギリスでも出版し、国際的な作家として名声を博した。また、ジェイムス・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper) は、アメリカ独立戦争を時代背景にした『スパイ』(*The Spy*) を1821年に出版した。さらに、女性作家としてはピーボディの友人であったキャサリン・マリア・セジウィック (Catharine Maria Sedgwick) がクエーカー教徒を主人公とする『ニューイングランドテール』(*A New-England Tale*) を1822年に、またネイティブアメリカンを描いた『ホープ・レズリー』(*Hope Leslie*) も1827年に出版した。

このような19世紀初頭のアメリカ文学の発展には出版社の存在も欠かせなかった。都市では南北戦争以前、独自の文化グループや知的気風を發展させ、1840年代までにはアメリカの小説の大半はニューヨーク、フィラデルフィア、ボストンで出版されるようになっていた (Fink 150)。アメリカの多くの出版社は、書物の小売業として始まり、出版業の拡大とともに、主要な出版社は小売り部門を諦め、本の製造と販売に集中した。

フィラデルフィアは、ニューヨークと同じく本の運搬に水路を利用し、ボストンよりも地理的に有利であった。また、フィラデルフィアは、ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) が1723年に移って以来、知的な環境を發展させ、女性と子供向けの定期刊行物を出版する国内の中心地であった (Rose 99)。その中でも有力な出版者は、アイルランド人のマシュー・カーレー (Mathew Carey) であった。当時外交官であったフランクリンにフランスで出会ったカーレーは、彼の印刷室で働いたことがあった。その縁か、1782年にフィラデルフィアに移住したカーレーは、『アメリカン・ミュージアム』(*The American Museum*) の編集刊行を始めた。1793年には、カーレーは書店を開店し、アメリカ人作家を最初から援助したが、販売の面で頼っていたのはイギリス人作家の作品であった (Madison 9)。カーレーは、イギリス生まれのスザンナ・H・ローソン (Susanna H. Rowson) の『シャーロット・テンプル』(*Charlotte Temple*, 1791) の米国版を1794年に出版し、それはベストセラーとなった。カーレーは1820年代に全米で発行された書籍の四分の一近くを出版した。しかし、1820年代に最も人気のあった作家は、ホーソンも愛読していたイギリスのウォルター・スコット (Walter Scott) であった。

フィラデルフィアはアメリカで最初に出版の中心地となったが、直ちにニューヨークが後に続いた。ニューヨークの出版界の発展には、1825年に完成したエリー運河がエリー湖からニューヨーク港に注ぐハドソン川の上流までを結び、東部から中西部への本の運搬を容易にしたことがある (Fink 151-52)。1819年に『スケッチ・ブック』を最初に出版したニューヨークのC・S・ヴァン・ウィンクル (C.S. Van Winkle) は、『出版社の手引き』(*The Printer's Guide*) を1818年に初めてアメリカで上梓し、出版社の市場への登場を促した人物として知られている。また、ニューヨークのハーパーズ (Harper's) は1817年の創立から小売業は避け、南北戦争中に雑誌を出版して成功し、アメリカの有力な出版社に成長した。

さらに、ニューヨークではクーパーの『スパイ』を1821年に出版したチャールズ・ウィリー (Charles Wiley) が1807年に書店を開店していた。『スパイ』の人気のために、クーパー自身は気に入らなかったが、直ぐに「アメリカのウォルター・スコット」として知られるようになった (Madison 15)。ピーボディのいとこのG.P. プトナム (G.P. Putnam) は、1833年からニューヨークのウィリー&ロング (Wiley & Long) で働き始めた。そこは1840年からウィリー&プトナム (Wiley & Putnam) となり、ホーソンの初期作品をピーボディと共同出版した。1841年にロンドンに行ったプトナムは、アメリカの本を販売するために店舗を構え、帰国後はプトナム&サン

ズ (Putnam & Sons) (1866 年から) を設立した。プトナムは、ホーソン、アービング、クーパーなどアメリカ人作家の本を出版してアメリカ文学の発展に一翼を担った。

ボストンには教育、出版、文学において伝統があったが、ボストンの出版社は 1869 年の大陸横断鉄道の完成までは、地域の出版社に留まり、小売業を長く続けていた (Fink 151)。それはボストンにはボストン港があるものの内陸への本の運搬には有効な手段がなかったからである。ボストンの有力な出版社の一つに、ホーソンの『緋文字』(*The Scarlet Letter*) やそれ以降の作品の出版を一手に引き受けたティクナー&フィールズ (Ticknor and Fields) があった。ウィリアム・デービス・ティクナー (William Davis Ticknor) は個人的にもホーソンと交友関係にあった。ティクナーは、1832 年にボストンのオールド・コーナー・ブックストアでアレン & ティクナー (Allen & Ticknor) として出版業界に参入した。アレンの引退後、ティクナー が一人で経営を行い、出版物は“Ticknor's books”と呼ばれ、「彼は文学界に対するアメリカの態度を変えた慎重だが強くて積極的な人」であったと言われている (Ticknor 18)。1845 年にジェームズ・トーマス・フィールズ (James Thomas Fields) とジョン・リード (John Reed) がパートナーとなり、リードが引退した 1854 年からティクナーの亡くなった 1864 年までティクナー&フィールズとして出版社を続けた。その出版社のあったオールド・コーナー・ブックストアは「機知に富んだ人、詩人、科学者、哲学者、そしてあらゆる職業における顕著な人達」の集まる場所となった (Ticknor 24)。まさしく、そこは知的コミュニティの一つの核を形成したと考えられる。加えて、出版社の発展の背景には、19 世紀初頭における印刷技術の革命やロール紙を製造することが出来る紙製造機の発明があった。このような中でピーボディは、1840 年にボストンで書店を開店し、1851 年まで経営していた。² 19 世紀の中ごろにアメリカ文学が開花するには、作家を支えた出版界の存在や発展も不可欠であった。

第二章 ピーボディの書店

ピーボディは 1840 年 8 月に様々な人々の援助を受けてボストンのウエスト・ストリートに書店を開店した。当時、北部の知識人の集まるボストンではニューヨーク程全国的ではないものの書店、出版社、印刷所がワシントン・ストリート、スクール・ストリート、さらにコーンヒルに立ち並ぶようになっていた。このような状況下で、ピーボディがどのようにして書店開店の考えに至ったかは謎であると言われている (Ronda 182)。ピーボディの書店開店の動機を考えるに当たり、それ以前の教育者としてのピーボディの経歴から彼女の信念を検討する。

ピーボディは 1825 年からボストン近郊のブルックリンで妹のメアリー (Mary) と共に学校を経営し、教壇に立っていた。その学校に、ピーボディが 1811 年に初めて説教をセイラムで聴いて以来、尊敬していたユニテリアン派の著名な牧師のチャニングが娘を入学させていた。メーガン・マーシャル (Megan Marshal) によれば、ピーボディの教育方針は「褒美目当てで、あるいは

は罰を恐れて勉強するのでは、『深遠でない表層的な』知識しか得られない」というものであった(173)。当時ピーボディは勉強に対する自発的な動機づけに既に気づいていたのである。また、1830年から女性のための歴史を読む読書会を開き、討論の場も設けていた。しかし、収入を増加させるために下宿させた子供の父親のスキャンダルにピーボディが巻き込まれたために学校の生徒数は激減し、学校経営は失敗に終わった(Marshall 225-26)。

1834年、ピーボディはブロンソン・オルコット(Bronson Alcott)の新しい学校の助手になる取り決めをし、同年9月に開校したボストンのtemplarschoolで授業を担当した。³しかし、ピーボディには給料が支払われず、またピーボディは徐々にオルコットが「生徒達が道に迷うようそそのかし、そして罠に落ちると彼らを辱める」と思い、教育方針に反対を唱え始め、オルコットと決別した(Marshall 320)。ピーボディの生徒の自発性を重んじる教育方針は、ここにも表れている。ピーボディは、当時の罰を与える教育とは異なる教育方針の実現と、ピーボディ家の家計を助けるために、templarschoolに関わったがうまくいかなかったのである。

このような経験をしたピーボディは教育界から遠ざかり、書店を開店して女性としてはおそらく初めてボストンのビジネス界に参入した。女性であるピーボディのビジネス界参入に関して、1840年6月7日付の手紙でチャニングは、自信を持って言える唯一のこととして「その仕事にはあなたの性に合わないものは何もない」と遠回しに励ました(*Reminiscences* 103)。ピーボディの書店には教育者としての経験と信念が反映されている。それは、書店がヨーロッパから輸入した本や雑誌を中心に扱い、貸出図書館も兼ねていたことに表れている。当時、大学の図書館や1807年に始まった会員制の私立図書館であるボストン・アセニウム等を除き、公の図書館はなく、アメリカ最古の図書館であるボストン公共図書館が創立されたのも1848年であった。ピーボディの貸出図書館は本を借りて読むことが容易でなかった時代の需要に応えたものであり、学ぶ機会を人々に提供しようとする彼女の教育者としての考えが表れている。

ピーボディのこの精神が反映された書店を様々な人々が援助した。例えば、1822年にピーボディのギリシャ語の個人教授であったエマソンは、超絶主義の雑誌、『ダイアル』の創刊号にてこの書店の案内を掲載するよう編集者のフラーに、次のように依頼している。

Can you notice Miss Peabody's Bookstore in your "Intelligence" chapter. If I had not so overwritten, I would do that also like Peter Quince or his crone who wd. play all.
(Emerson 215)

エマソンは単なる利益目的ではないピーボディの書店を応援したのである。

エマソンがピーボディを高く評価することになった切っ掛けは、ピーボディが1830年に出したジェランド(de Gerando)の『自己教育』(*Self-Education*)の翻訳にある。マーシャルによれば、

エマソンはピーボディの翻訳から「靈感」を得ることができ、彼女を有能な人物であると認めたのである (334)。また、エマソンはフラー宛ての下記の手紙の中で、ピーボディがしっかり仕事をやるから任せるように、と述べているところにも彼女への信頼が表れている。

Now appoint Miss Peabody your committee for this department: She will draw up the little chronicle with the utmost facility & perfectly well: & shall be supplied by such rills as I have named, —not to mention all our possibilities. (Emerson 214)

エマソンのみならずチャニング牧師もピーボディに寄付をし、歴史家・政治家のジョージ・バンクロフト (George Bancroft) はイタリアの書籍をピーボディに貸して貸出図書館の基盤作りに貢献した。さらに、かつて自分の娘をピーボディの学校に通わせていたチャールズ・ジャクソン (Charles Jackson) 判事は、ピーボディが 500 ドルの融資を受けるに当たり、保証人になった (Marshal 391)。ピーボディの書店を援助する人々の存在は、彼女のこれまでの学校経営が成功したとは言えないものの、ピーボディの熱意、能力や教育方針が多くの人々に認められていたことの証であろう。

書店兼貸出図書館の経営のみならず、ピーボディはフラーの女性達のための「談話会」(“Conversations”) も書店のフロントパーラーにて開催した。1 回目のシリーズは 1839 年 11 月 3 日から、まだ開店していないウエスト・ストリートの書店で、25 人の女性を集めてギリシャ神話について行われた。2 回目は 1840 年 11 月に美術についてピーボディの書店で行われた。3 回目は 1841 年 3 月 1 日から 5 月 6 日にかけてジョージ&ソファイア・リプレイ (George & Sophia Ripley) の自宅とピーボディの書店で行われた (Ronda, “1840s from the School to the World” 234)。

このようにピーボディの書店は、本の販売というよりも啓発の場、教育の場のようなものであった。女性の入学を認める大学がまだなかった時代に、ピーボディは女性に教育の場を提供したのである。女性の教育に関してピーボディは「女性に対する知性の育成があることをたとえ認めたとしても、知性の育成は感情の育成よりも一般的に少なく、知性を制限する多くの環境が女性にはある」と述べている (*Theory* 40)。さらに、ピーボディは「知性と教養のための 7 時間は多すぎない」と述べ、当時一般的に女性が針仕事に多くの時間を費やしていたことについて以下のように述べている。

It is extremely important, that every woman should know how to use her needle skillfully and expeditiously, so that this family care need not be a burden; but that secured, I should not be in favor of her giving many hours to sewing, unless

circumstances required it. (*Theory* 62)

ピーボディは女性の針仕事を全く否定しているわけではないが、不必要に長時間針仕事に時間を費やすことをよしとしていない。当時の女性の置かれた現状を認識しているからこそ、ピーボディは学校を開き、女子の教育に情熱を傾け、書店では大人の女性の教育に熱意を注いだのである。

さらに、ピーボディの書店は超絶主義者の会合の場所にもなり、1840年9月には超絶主義の最後の会合が開催された。超絶主義者の中で、超絶主義の根本的な問題である教会は改革できるかについて意見が分かれていたために、超絶主義クラブは解散することになったのである。ピーボディもこの問題に関心を示していたことは、1840年9月20日付のジョン・サリバン・ドワイト (John Sullivan Dwight)宛ての手紙から判断できる。彼女は、ジョージ・リプレイは教会組織を批判していたが、牧師のフレデリック・ヘンリー・ヘッジ (Frederick Henry Hedge) やセオドア・パーカー (Theodore Parker) 等は異なる意見を持ち、エマソンはどちらの側にもついていなかったという趣旨をその手紙の中で述べている (*Letters* 245-46)。⁴ 超絶主義クラブ解散後も、ジョージ・リプレイはユートピア共同体の計画を立てる会合をピーボディの書店で開いた。また、チャニング牧師はその書店の常連であった。まさしく、ピーボディの書店は知識人の知識欲を満たす場所であった。

一方、ピーボディは書店を拠点として出版の仕事も行った。1836年に超絶主義クラブに加わっていたピーボディは、1842年と1843年に超絶主義者の雑誌、『ダイアル』(Dial)の出版に携わった。もっとも、『ダイアル』の出版は収入よりも製作等に費用がかさみ、1843年4月廃刊となった。加えて、奴隷制に反対であったピーボディは、チャニング牧師のパンフレット、『奴隷解放』(*Emancipation*, 1841)や、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau)の「市民政府への反抗」(“Resistance to Civil Government”) (後の“Civil Disobedience”)掲載の1巻のみの雑誌、『エステティック・ペーパーズ』(*Aesthetic Papers*, 1849)も編集した。さらに、第三章で述べるが、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne)の初期の作品も出版した。

ピーボディの書店開店に経済的な目的があったであろうか。ピーボディの父親は歯科医師であったが、収入が十分でなかった上に、2人の弟は定職につくも長続きせず、借金を抱えており、加えてソファイアは頭痛持ちであり、エリザベスとメアリーのみが働ける状況にあった。ピーボディは長女として、決して裕福とは言えないピーボディ家の生計を常に心配していた。妹のメアリーとソファイアがキューバに行くことになったのも、ソファイアの偏頭痛の治療と交換にメアリーが家庭教師をすることで治療費と滞在費を稼ぐという経済的な理由があった。ソファイアとメアリーがキューバに滞在していた間(1833年-1835年)、ピーボディはテンプルスクールで働いていたのである。アメリカを1834年に訪問し、アメリカの女子教育を批判したイギリスの社

会理論家、ハリエット・マルティノ (Harriet Martineau) の手紙から、ピーボディは「お金の使い方で私が極端なけちという強い印象を与えたことが知れる」と述べ、以下のように金銭の価値について述べている。

Money has always seemed to me *what it is*; and so little value have I attached to it, that I cannot ascribe to myself any merit or virtue for giving it away. My principle is to spend my whole income, without reserving anything. For me to accumulate would be morally wrong. At the same time I inflexibly keep myself within my income…
(*Reminiscences* 100)

マルティノは誤解をしたようであるが、ピーボディは金を貯めるために節約していたのではなく、収入の範囲内で生活していただけである。書店は結果的に収入をもたらしたかもしれないが、書店開店の主たる目的は金銭ではないと考えられる。ピーボディの書店開店の動機は、知性を満足させる場、知のコミュニティの形成であった。

第三章 ホーソーンの初期作品の出版

ホーソーンが出版者としてティクナーとフィールズを信頼していたことは既述したが、無名時代のホーソーンに不信感を抱かせたと思われる出版者もいた。ホーソーンは、サミュエル・グリスウォルド・グッドリッチ (Samuel Griswold Goodrich) が発行していた『トークン』(*The Token*, 1827-1842) に 1829 年短編を送り始めた。T・ウォルター・ハーバート (T. Walter Herbert) によれば、グッドリッチはホーソーンの短編を匿名で出版し、利益とともに評判を得ていたが、ホーソーンは世間に認識されることがなかった (Herbert, "Different from Himself")。⁵ また、ホーソーンは、『アメリカンマガジン』(*American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge*) の編集のためにグッドリッチ等に雇われ、1836 年にボストンに引っ越したが、グッドリッチは約束通りに支払いをしなかった。そのために、ホーソーンは妹のルイーズ (Louisa) 宛ての 1836 年 2 月 15 日付の手紙で送金を依頼するとともに、グッドリッチとは「今や関係を絶った。そして彼には近づかないようにしようと思っている」。彼は「善良な類の人であるが、お金のことにに関してはむしろ良心的でない」と書き送っている (15: 236)。もっとも、グッドリッチからは後に送金されてきた。よって、1836 年 5 月から 9 月にかけてホーソーンは姉のエリザベスとともにグッドリッチ編著の『ピーター・パーレー』(*Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography, for the Use of Families*) のために仕事をし、それは 100 万部以上売れたが、100 ドル受け取っただけであった (Gale 388)。結局、ホーソーンはグッドリッチに対して不信感を抱いたために、疎遠になっていったと考えられる。

一方、ピーボディは1830年代に『トークン』や『ニューイングランドマガジン』(*New England Magazine*)に掲載されたセイラムの幼馴染のホーソンの短編を称賛していた(Marshall 351)。1837年には、短編をまとめたホーソンの『トワイズ・トールド・テールズ』(*Twice Told Tales*)がアメリカン・ステーションナズから出版された。同年にホーソンから『トワイズ・トールド・テールズ』を受け取ったピーボディは、後に妹メアリーの夫になるホレス・マン(Horace Mann)がマサチューセッツ地区の学校図書館用の本を探していたので、以下に引用する1838年3月3日付の手紙をマンに送った。ピーボディの感じ取ったホーソンの「自然への熱情」の是非はともかく、彼女はホーソンを「一級の天才」で「アービングに勝る」と称賛した。

There is a young man in this town—not so very young either—...of whom you have heard—the Author of the “Twice told Tales.” He is I think a man of first rate genius.—To my mind he [two words illegible] surpasses *Irving* even—in the picturesque beauty of his style—& certainly in the purity—elevation—and justness of his conscience—An extreme shyness of disposition—and a passionate love of nature—together with some peculiar circumstances have made him live a life of extraordinary seclusion. (*Letters* 199)

もっとも、マンは『トワイズ・トールド・テールズ』に感銘を受けず、特に結婚式に用いられる鐘が鳴る「婚礼の弔鐘」(“Wedding Knell”)の意図がわからないと評した(Ronda 168)。

さらに、ピーボディはホレス・グリーリー(Horace Greeley)出版の文学雑誌『ニューヨーカー』(1838年3月24日付)に書評を書き、ホーソンはウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth)のような哲学、「ワーズワースが自然の中で学んだのと同じような自然という学校や、同じ純粋な光を当てなければ学べない哲学」に従っていると評している(72)。さらに、ピーボディは、ホーソンには「実生活のありきたりの出来事の中に理想の美が最も明白に見られ、深く感じられる」かもしれないとも言う。加えて、ピーボディは、ホーソンの作品に劇的な出来事はなく、あるのは「人間の心」を探究する窓であると語り、ホーソンの特徴を認識していることを示している(72)。その書評の締めくくりとして、ホーソンは「多彩な天才の要素を示している作家達の1人」というのではなく、「同時代の作家の中で最高に偉大な作家としての位置を占める」と褒めたたえている(76)。これらのピーボディの批評は、彼女が教育者として作家、ホーソンの才能を見出し、世に伝えたいという彼女の強い気持ちを端的に表明している。ピーボディは明らかにグッドリッチとは異なる出版者であった。

また、1838年2月、ピーボディは、エマソンの『自然論』(*Nature*)とともに『トワイズ・トールド・テールズ』を彼女の信奉するイギリスのワーズワースに送り、ホーソンの本を紹介した。

ピーボディは、チャニングからワーズワースの詩を紹介されて、まだアメリカでは知られていなかった頃から愛読していた。さらに、ピーボディは10年近く前からワーズワースへ手紙を書き、ダヴ・コテージに招待されたこともあった (Marshall 183)。ピーボディは信奉するワーズワースに自分と同様にホーソーンを理解してほしかったのであろう。

加えてピーボディには、ホーソーンは「本屋との交渉の才能がない」 (*Letters* 200) とされるために、ホーソーンのキャリアのマネジメントを引き受け、ホーソーンにボストンの税関での仕事も紹介した。1838年、ピーボディは、友人の夫でボストン港の税関の徴収官であるジョージ・バンクcroft (George Bancroft) に面会してホーソーンのために仕事を依頼した結果、ホーソーンは翌年ボストンの税関で職を得ることができたのである (*Letters* 217 - 18)。

このように公的にも私的にもホーソーンを援助したピーボディは、1840年に開店した書店でホーソーンの『おじいさんの椅子』をウィリー&プトナムと共同で1840年12月(1841年付)に出版し、続いて『有名な昔の人達』を1841年1月に、『自由の木』は3月に、E.P. ピーボディ出版と明記して出した ("Note" 15:457 & 503)。これら3冊の本を『セーラムガゼット』は、「ホーソーンの新刊」として大きな字体で宣伝した ("Note" 15: 518)。しかし、本の売れ行きが芳しくなかったために、ロンダによれば1841年までにホーソーンはピーボディにいらだちを覚え始めた。加えて、ホーソーンには『トワイス・トールド・テールズ』の別の版の出版に関して気分を害することがあった。それは、ピーボディがホーソーンの許可なくジェームズ・モンロー (James Munroe) と、子ども向けの本と『トワイス・トールド・テールズ』を一緒にした別の版をつくる交渉を行ったことに原因がある (205-06)。それは、ホーソーンが自分のことを「ミスターホーソーン」とよそよそしく呼んでいる1841年1月23日付の手紙をピーボディ宛てに出していることから判断できる。その後ホーソーンは、さらなるシリーズを出すために、モンローではなくタッパン&デネット (Tappan and Dennet) と契約した。ピーボディはホーソーンのよき理解者であり、様々な手助けをしたが、うっとうしい存在になっていったようだ。

その後、1849年の冬にフィールズがセイラムのホーソーンを訪問した時に、『緋文字』の出版の手筈が整った (Fields 15)。その時、アメリカン・ステーションナズから出版された『トワイス・トールド・テールズ』の販売は順調でなかったため、ホーソーンは以後の作品をティクナー&フィールズから出版することにした。キャロライン・ティクナー (Caroline Ticknor) によれば、フィールズはすばやい認識力、聡明さ、社交性のある人物であった (Ticknor 24)。フィールズは出版者としてピーボディよりも才能があったようだ。チャニングはピーボディが書店を開店する前、彼女のビジネスの才能に関して、ピーボディには「ビジネスのためのどんな能力があるのか、あるいはその仕事にはどんな才能が必要なのか分からない」と懸念していた。出版社としてのピーボディの書店は、チャニングの心配していた通りの結果になった (*Reminiscences* 102)。

ピーボディは、ホーソーンの才能を見出した一人として、ホーソーン作品の出版等に尽力し

だが、ホーソーンが望むようには販売がうまくいかなかった。チャニングは1841年に亡くなり、超越主義のメンバーのフラーはニューヨークに引っ越し、エマソンはコンコードの近隣との付き合いを始めており、ピーボディの親しかった人々は別々の道を歩み始めた。ピーボディは、再び教育そのものに興味を持ち始め、書店は1851年に閉店した。

おわりに

19世紀初頭の文学に関して、作家、出版社、読者はイギリスを向いていた。その一方で、アメリカをテーマにした作品を描くアメリカ人作家やそれを出版する出版社も存在し始めていた。そのような作家や出版社の存在が読者にアメリカ文学を提供し、19世紀半ばにおけるアメリカ文学のイギリス文学からの独立を促進した。このような過渡期にピーボディは教師としての信念を持ち、ボストンで貸出図書館兼書店を開店した。それによりピーボディは超絶主義者としての活動に加え、女性への教育にも貢献し、ホーソーンの家作家としての才能を認め、初期作品小説を出版した。書店を通してピーボディはアメリカ文学の発展に貢献したと言える。ピーボディの書店そのものは、事業としては成功したと言いが、謎と言われてきた書店開店の動機は、その時代に必要とされた知のコミュニティを形成することであったと考えられる。その結果、ピーボディはアメリカのヨーロッパからの知的独立の一端を担ったと考えられる。

注

1. 倉橋洋子「19世紀初頭のアメリカ文学界と『ファンショール』」『世界文学』10 (2008): 36-43. 参照
2. Galeによればピーボディが書店を開店したのは1840年で閉店したのは1851年である (380)。書店の閉店の年号を1852年とする説もある (“13-15 West Street Elizabeth Peabody Bookstore and Circulating Library”)。
3. ピーボディは、テンブルスクールの特徴的な教授法であるオルコットの生徒との対話を記録した『ある学校の記録』(*Record of a School*) を1835年に出版してワズワースに献本した。
4. チャニングの1839年1月14日付のピーボディ宛ての手紙によると、「ジョージ・リプレイは宗教組織の批判から社会組織の批判に向かい、そして利益を求めて競争する代わりに協同を原理とする新しい社会を組織することの提案に至った」(Reminiscences 102)。
5. ホーソーンがコレクションを出版する考えを持ちかけると、グッドリッチは非協力的であった。それで、友人のホレーショ・ブリッジ (Horatio Bridge) がホーソーンには秘密で、損失を補償することにしたなら、グッドリッチは引き受けた (“Different from Himself”)

引証資料

Boston Landmarks Commission. “13-15 West Street Elizabeth Peabody Bookstore and Circulating Library.” 9 Sep. 2015. <https://www.cityofboston.gov/images_documents/13-15_West_Street_Library>

- Study_Report_tcm3-31148.pdf>
- Emerson, Ralph Waldo. *The Selected Letters of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Joel Myerson. New York: Columbia UP., 1893.
- Fields, James Thomas. *Yesterdays with Authors*. Boston: 1879.
- Fink, Steven. "Book Publishing," *American History through Literature, 1820-1870*. Vol.1.Ed. Janet Gabler-Hover & Robert Sattelmeyer et.al. Thomson Gale, 2006.
- Gale, Robert L. *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia*. New York: Greenwood Press, 1991.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Letters, 1813-1843. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Thomas Woodson, et al. Vol. 15. Columbus: Ohio State UP, 1984.
- Herbert, T. Walter. "Different from Himself: Hawthorne and the Masks of Masculinity" American Literary Association Convention, May 2003. 8 August 2015 <<http://www.hawthorneinsalem.org/ScholarsForum/MmD20141.html>>
- Madison, Charles A. *Book Publishing in America*. New York: McCraw-Hill, 1966.
- Marshall, Megan. *The Peabody Sisters: Three Women Who Ignited American Romanticism*. Boston: Houghton Mifflin Co., 2005.
- "Note," *The Letters, 1813-1843. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Thomas Woodson, et al. Vol. 15. Columbus: Ohio State UP, 1984.
- Peabody, Elizabeth Palmer. *Letters of Elizabeth Palmer Peabody: American Renaissance Woman*. Ed. Bruce A. Ronda. Middletown: Wesleyan UP, 1984.
- . "Review." *Nathaniel Hawthorne: Critical Assessments*. Ed. Brian Harding. Vol.1. Mount Field: Helm Information, 1994.
- . *Reminiscences of Rev. Wm. Ellery Channing*. Vol.4. Boston: 1880. Reprint.
- . *Theory of Teaching, with a Few Practical Illustrations*. Boston: E.P. Peabody, 1841. Reprint.
- Ronda, Bruce A. *Elizabeth Palmer Peabody: A Reformer on Her Own Terms*. Cambridge: 1999.
- Ronda, Bruce A. "1840s from the School to the World." *Letters of Elizabeth Palmer Peabody: American Renaissance Woman*. Ed. Bruce A. Ronda. Middletown: Wesleyan UP, 1984.
- Rose, Anne C. *Voices of the Marketplace: American Thought and Culture, 1830-1860*. Lanham: Roman & Littlefield Publishing, 2004.
- Tharp, Louise Hall. *The Peabody Sisters of Salem*. Boston: Little, Brown and Company, 1950.
- Ticknor, Caroline. *Hawthorne and His Publisher*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1913. 14 Feb. 2014<<https://archive.org/details/hawthpublisher>>
- Winship, Michael. *American Literary Publishing in the Mid-Nineteenth Century*. Cambridge UP, 2002.